

【大阪の歴史散歩】

おお さか まち じゅう し ほう しょう
大坂町中時報鐘

寛永11年(1634)三代将軍家光が上洛した際、大坂に立寄り、大坂城に入った。そのときの地元の歓迎に応じて家光は大坂の三郷(天満・北・南を指し、当時の三郷の人口は約28万人であったとのこと)の町内の地子銀(現在の固定資産税)を永代免除にする約束をした。町民から選ばれた行政を司る長であった惣年寄はこの恩恵に感謝し、釣鐘を造営して時報を町中に知らせた。

この鐘楼は時報の役目のほか三郷年寄の会合やそばに火の見櫓を建てて、防火に供したが、その後何回かの大火に遭遇した。明治3年(1870)撤去され、時報は大坂城内から打出す号報、いわゆる『お城のドン』に取って代わられた。

その後、55年間は旧大阪博物場(西町奉行所から最初の大坂府庁が置かれ、現在の大坂商工会議所・マイドーム大阪・国際ホテルのある場所)に露座で保存されていた。

大正15年(1926)現在の大坂府庁が新築され、屋上に鐘楼を設けて『大坂町中時報鐘』として懸け

られていた。当時の建設技術としてこの大型の鐘(重量2.7ton程度)がどのように屋上に吊上げられたのか不思議でもある。

昭和60年、地元の熱意の昂まりがあり、昔の釣鐘屋敷の跡(住友生命有信寮:現在の住友釣鐘倶楽部)へ里帰りした。

今では、8時、12時、日没の3回、コンピュータ制御で自動的に時報が打ち鳴らされている。鐘楼の屋上には360年前の鐘楼の高さ9間にちなんで、時計の針を模した塔が取付けられている。

鐘楼の所在地「大阪市中央区釣鐘町2丁目」はもちろんこの故事に由来している。

大阪府の「有形文化財工芸品」の第一号として一見の価値があります。現地へは、地下鉄・京阪電鉄天満橋駅より徒歩約5分程度。

